

八

ベッドの上に腰を下ろし、またもや目覚めはじめた獣欲を持って余しはじめている私の耳に、奇妙な音が聞えた。

私は視線を、その音が聞えてくるところ、入口のドアに向ける。

その音は断続的で、固く鋭利なものでドアを引っ搔く時のような音であった。

私はベッドから立ち上がる。

ドアを開いた私の足元に黒い影が走り抜ける。黒猫のエンプーサが部屋に入り込んで来た。

私と黒猫とは一瞬、お互いを探り合うように視線を絡み合わせる。だがそれも一瞬の事であり、すぐにエンプーサはその表情を窺わせない瞳で私を見上げ、喉を鳴らした。

私は、その場に膝を付き、エンプーサに手を差し伸べる。

逃げようともせず手に身体を擦り寄せて来た猫に、私は柔らかくビロードのような毛皮の手触りを感じる。

エンプーサはこうして改めて見ると、美しい猫である事が今更ながらに実感できる。毛皮はあくまで純粹の黒であり、身体の線も、同種族にあたる肉食獣の無駄の無いなめらかさと、内に秘めた張りとはっきりと浮き彫りにしている。

私はベッドの上に抱き上げたエンプーサを置き、喉を指で撫ぜる。猫が喉を鳴らし、舌を私の手の甲に這わすと、ざらざらとした濡れた粘膜の感触が感じられた。

ふと私の心に一瞬の疑問が去来する。

お前は何度この舌で、雅美を淫らな絶頂に導いたんだ？

お前は何度、雅美の欲情の滴りを舌で味わったんだ？

そしてお前が絶頂に導いたのは、雅美だけなのか？

エンプーサが、私の手を舐めるのを止め、猫特有のしなやかな身体の動きでベッドの上から飛び上がり、横の机の上に乗る。そのまま私をまっすぐに見詰め、そしてふっと横を向く。

それはぞっとする程に、人間的な仕草であった。

再びエンプーサは机の上から跳びあがり、床の上に着地すると、再び私に何かを告げるような

視線を向け、開いたままだったドアの隙間からずりりと出て行いった。

私は、机の前に置かれた椅子に腰を下ろす。

昨日、この机の上で書いた文章を思い出す。そして何故か、その後の風呂場での行為の後で彰子が言った謎めいた言葉が脳裏を過ぎる。私が生前の恩師の事を尋ね、その後の私の間を誤魔化すような口付の後に、彼女が私に言ったあの、謎めいた言葉……。

——お解りになりますわ……。あの、主人が生前使っておりました離れの部屋に滞在なさっている——

私は机の抽斗を開ける。

それは当然の事のように、そこにあった。凝った金細工が施された革表紙の日記帳と、その日記帳より二回り程大きな一冊のアルバム。

私はそれらのものがここにあることを、あらかじめ知っていたのではなかったのか？ あの、この屋敷での初めての夜に、彰子と雅美の行為を目にしたときから、既に。

その日記帳とアルバムには、小さな真鍮製の鍵が付けられていた。そしてその鍵は私の予想通りに、開かれていた。

私は日記帳とアルバムを抽斗から取り出し、机の上に置く。

アルバムを開こうとした手を、一瞬脳裏に過つたためらいに止める。しかしそれは本当に一瞬だけの事であった。

私はアルバムの表紙を開く。

耳から雨音が消えた。

セピア加工されたカビネ版の写真の中で、今よりも若い彰子が微笑み、ポーズを取っていた、全裸で。

そしてその写真の下には、現在よりも8年程以前の日付が恩師の書くペン字で記されていた。

写真の彰子の浮べる微笑みには、まだ抜け切れぬ恥ずかし気な表情が透けて見えている。私の記憶にあるのよりも小さく見える乳房、そして現在の豊かさを髣髴とさせるような腰の張り、翳るような陰毛に飾られた下腹部、太股、脚。

期待（それとも恐怖か？）に震える手でめくった次のページには、最初のものよりも二週間程後の日付が記せられた写真が貼られていた。

その彰子は、一枚目の写真では隠していた陰部を露出していた。撮影された場所は多分、居間であろう。見覚えのある絨毯の上で、彼女が写真機に向かって大きく脚を広げた格好で座り込んでいる様が印画紙に焼き付けられている。顔はさすがに恥ずかしいのだろう、背けられ、その表情も固い。

そして三枚目の写真は、彼女を背後から撮影したものだ。日付は二枚目のものより二日後のものであった。

二枚目の写真が最初から二週間、そして三枚目とその二日後……。

私はその日付に込められた意味を思う。

写真の彰子は肩と首で体重を支え、尻を写真機に向けていた。脚を開き、股の間から後ろに伸ばした両手で尻の肉を開き、その狭間にある女の秘めた二つの箇所を自ら晒け出していた。セピア色したその写真からでもはっきりと、股間の秘肉と性器が愛液の艶を湛えている事が見て取れる。

そして次の写真は、両手を手錠で拘束され、その手錠の鎖に掛けられた太い紐によって、背が立つぎりぎりの状態で天井から吊るされた彼女の姿を捉えたものだった。

しかしその写真の彼女は、今までの彰子ではなかった。表情には締りがなくなり、惚けたようなその視線は、辛うじて写真機に向けられているが、その実何も見てはいない事は明らかだった。乱れた髪が、多分汗の所為だろう、頬と首筋に張り付いており、乳房には、はっきりと歯形と思われる赤く変色した形が刻まれている。そして下腹部の陰毛は、汗と体液により濡れ、太股には、男の精液と思われる白濁した粘液がこびり付き、垂れ下っている。

その写真の撮られた状況は、想像するまでもなかった。彰子は拘束され、天井から吊られ、乳房に歯を立てられながら犯されたのだ。そしてその彰子を犯した男、つまり今は亡き彰子の夫は、その直後の彼女の姿を写真に収めたのだろう。

彼女の夫、つまり今は亡き恩師は、この写真を撮った後、彼女にどのような行為を行ったのだろうか？

私の中の欲望が昂ぶり、アルバムのページを繰る手が早まる。

疑問の答えは、やはりアルバムの中に見つかった。

その写真は、前の写真と同じ格好で天井から吊るされた彼女が写されていたが、その全身には、はつきりと鞭の跡と分かる傷が赤い線を引いていた。特にその赤く腫れた傷跡は二つの乳房と尻に集中しており、乱れた髪が張り付く彼女の頬には涙の跡が残っている。

そして、その写真と同じページにはその直後に撮影されたものである、二枚の写真が張り付けられていた。

両手を拘束され、床に跪いた不自由な格好で半ば勃起した男の陰茎を啜え、更に固く張り詰めさせようと舌を這わす彰子の顔のクローズアップ。

唇から伸ばした舌の上に、陰茎から吐き出された白濁を受ける彰子。その恍惚とした表情と、新たな涙で濡れる頬。

ドアが開いた。

その音に私は驚き、振り返る。

そこには全裸の彼女がいた。

私は写真の中の彰子と、今目前にいる現実の彰子を見比べる、そして一瞬、非現実的な考えが頭を過る。

写真の中の彼女が何故此処にいるのだ？

しかしそんな思いは、次の瞬間には私の脳裏から消える。

ドアを閉め、室内に入ってきた彼女が、両手を無毛の下腹部に当て、私に言う。

「剃ってしまいましたのよ……。貴方のお気に召しますかしら」

そして、微笑。

私は椅子から立ち上がり、机の上から鞭を取り、彼女に命じる。

「ベッドに行け、廻ってやる……」

私はベッドに仰向けに横たわる彰子の両腕を、スボンから外したベルトでベッドのヘッドボードに結び付ける。

両手を上げた格好で縛り付けられた彼女が、私の向かってどこか甘えるような口調で言った。

「ご覧になったのね……アルバム」

それは問いではなかった。

「ああ。見た」

彼女を見下ろす私はその瞬間、彼女の身体の奥から、ぞくつとするような衝動が湧きだし、全身を染め上げて行くのを見る。

そして彰子は、写真の中の自分が、今は亡き夫から責めを受けた時の苦痛と惨めさと、そしてその後に行って来た、その全てを覆い隠してしまうような強い快樂とを思い返す。

「激しく……して」

その彰子の言葉に、その、亡き恩師に幾度となく囁いたかも知れぬ言葉に、私の中に僅かに残っていた躊躇が完全に消滅する。

鞭を振り上げる。

鞭の音と、悲鳴が部屋に響く。

私の振るった鞭は彰子の乳房を打ち、その白い皮膚に赤い線を刻印する。鞭打たれる苦痛に彼女が全身を海老のように反り返し、痛みに耐える表情を浮べ、潤んだ瞳が私に向けられる。

私は、その瞳の中に彼女の欲望を読み取る。私は獣のように低くうめき声を上げ、そして、私の中に潜む残酷な血の衝動に身を任せる。

私は、彰子の全身に向かって鞭を振り下ろしつづける。

彼女の身体を打つときの鞭の手応え、音、そして耐え切れない苦痛に漏らす悲鳴、性交時の快樂のよがりのように悶える身体、鞭による傷の狭間で立ち上がる乳首、よじり合される太股の狭間に光る、汗と愛液のぬめり。

鞭を振るいつづけた手に疲れを覚え、その手を下ろした時、彰子の全身は赤い鞭跡が無数に交差し、その唇と乳房は苦痛の余韻に微かな痙攣を繰り返していた。だが彼女の頬は赤く火照り、上気しており、息を乱しながらも私を見詰める視線は、欲情に充ち充ちていた。

私は、彼女の傷ついた全身とその表情を見詰め、新たな欲望を覚える。

下腹部では陰茎が勃起し、スポンを押し上げていた。

「脚を開け、お前の淫らな性器を鞭打ってやる」

彰子の瞳に恐怖が走る。そして私はその彼女の表情に更に欲望を昂める。

「早くしろっ！」

叫び、鞭を力の限り太股に打ちつける。

一際大きな悲鳴を上げ、彼女が拘束された不自由な身体を精一杯に縮める。

「お前の濡れた性器をさらけ出せ、彰子。それとも昨日の夜の雅美のようにブランドイをその傷だらけの身体に振り掛けてやろうか」

彰子が私の目を覗きこみ、まぎれもなく私とその残酷な行為を実行するであろう事を知り、恐怖に震える声で言う。

「いや、それは……。お願い」。

彰子が脚を大きく開いて行く。無毛の下腹部の奥に、愛液に濡れた桜色の粘膜がさらけ出される。

私はそんな彼女の姿を食い入るように見詰め、興奮に掠れた声で言う。

「脚を上げろ、胸に太股が付くまでだ。全てだ、全てを晒け出せ」

彰子が脚を高々と上げ、私の要求に答えようと身体を屈曲させて行く。私は彼女の姿を足元の方向から見詰め、その淫ら極まり無い姿を楽しむ。

大きく開いた脚の狭間に、無残な程に剥き出しになった性器と後孔、肉襞の奥から漏れだした愛液に濡れ光るその箇所は、彼女の言葉の通り完全に毛を剃り上げられており、その事がいつも淫らさを助長している。

私は彼女の足首を掴み上げ、両手と同様にベッドのヘッドボートに結び付ける。

身体を無理な姿勢で折り曲げられ、秘めた女の部分をこれ以上ない程に剥き出しにされ、拘束される彰子。私はその顔を持ち上げ、唇を合せる。

彰子が舌を差し込んで来る。

私の口の中で、彼女の舌と私の舌が絡まり合い、互いをまさぐり合う。

引き剥すように唇を離れた後、私は再び鞭を取り、彼女の広げられた股間を正面に見据えるこ

とができる位置に回り込む。

彼女の股間は、これから敏感な箇所を受けるであろう苦痛への期待によつて、肉襞が新たな愛液を滲ませ、濡れていた。

私が鞭を振り上げると、まるでその鞭を誘うかのように膣口と後孔が蠢く。鞭が空気を切り裂く音が私の耳を劈いた瞬間、手に柔らかいものを打った時のような、手応えが感じられ、水溜りを踏みつけた時の濡れた音がした。

そして彰子の張り上げる、性交による絶頂の時のような悲鳴。反射的に股を閉じようと動く尻の筋肉。苦痛によじれる身体。快樂の泣き声。

私は知らぬ間に叫び声を上げていた。鞭を握る手が何度も振り下ろされ、その度に彰子が悲鳴を繰り返す。

私は、耐え切れなくなる瞬間まで鞭を振るいつづけ、そして床に投げ捨てる。

私は彰子の傷つき、愛液に濡れた股間に顔を寄せる。舌が熱く火照った肉襞を捉え、その隙間を這い、上端の尖りに達するまで舐め上げる。

愛液と血の味がした。

彰子の苦痛と快樂にすすり泣く声が聞えはじめる。太股が、私の顔を挟み込もうと動き、拘束されている事によりそれが無理だと知ると、彼女は腰を振りだし、私の口に性器を押し付け、擦りつける。

愛液が溢れだし、私の唾液と混ざり合い、ベッドのシーツを汚していく。

私は、まだ快樂を得ようと腰を振りつづける彰子から口を離し、スポンと下着を脱ぎ捨てる。

ベッドに上り、彼女の足元近くににじり寄り、勃起しきった陰茎を片手で支えながら、傷つき、愛液にまみれた彼女の性器に張り詰めた亀頭を押し付ける。

「欲しいか？」

糸を引くほどに濡れた肉鏹が歪み、そして欲情しきった声で、彰子が叫ぶように言う。

「下さい、貴方のもので私を、私の中をかき回して、私を犯して！」

私は腰を突き出し、彼女の中に亀頭が半分ばかり隠れるだけ軽く挿入する。

無毛の、そして血と愛液で飾られた性器に私の亀頭が半ば埋ったその光景には、陰惨なほどの淫らさがあり、その事が私を更に残酷にする。

陰茎を咥えこんだ彰子の性器の肉襞を、私は指で左右に捲り上げ、その内部の濡れた粘膜を指で捻り上げる。尿道口付近を撫ぜ回し、起立した陰核を剥き出しにし、表皮をずり下げ、指の間に挟み込む。

奥深くまで陰茎を挿入され、深い充実感にも似た快樂を待ち望んでいた彰子がすすり泣くような声で哀願する。

「お願い、意地悪をしないで、早く」

私は、その欲求を満たす事なく、浅く陰茎を挿入したまま彼女の性器をいたぶりつづける。彼女の泣く声に、うわ言のような言葉が繰り返し混じるようになるまで私は、その行為をつづける。

指が愛液でぬめり、女の匂いが鼻をつく。

すすり泣く彼女が脚を細かく痙攣させはじめた頃、私は一旦陰茎を膣から抜きさる。

「いやあ！ そんな事、お願いっ」。

私は彰子の、その悲鳴混じりの声が終るよりも早く、彼女の膝を掴み、更に脚を左右に大きく開き、そして一気に挿入した。

粘膜を切り開いて行くような快感が陰茎から背骨へと貫き通り、私の口から快樂のうめきとなつて外に出る。

彰子は、急激な私の挿入に鈍い苦痛を感じ、低く悲鳴を上げ、そして次にやって来た大波のような快樂に全身を震わせる。

私は欲望の赴くままに、激しく腰を振り、陰茎をめぐり込むようにして、彼女を蹂躪する。

意識しない泣き声の混ざった快樂の声を彼女は上げつづけ、全身を激しく身悶させる。ベッドが、私と彰子の動きによって軋みを上げ、二人が呼吸する乱れた息の音と共に部屋に満ちていく。

背中を、汗が流れ落ちる時のくすぐったいような感触が伝わって来る。私を受け入れる膣が、私の陰茎を求め、蠢くのが感じられる。

私は目を開き、快樂に歪む彰子の表情を見詰めながら、彼女に覆い被さるように身体を倒し、傷ついた乳房に舌を這わし、鞭跡を舐め、汗の塩辛さと血の鉄の味を味わう。

彰子の切羽詰った切れ切れの声が、私の耳をくすぐり、身体の動きが強く、そして激しくなる。絶頂が近い。

私は起立した乳首を歯の間に挟み込み、強く噛む。その瞬間彼女は、自分の身体に覆い被さった私の身体を振り落とす程に、大きく全身を悶えさせる。

乳房の上に肋骨が浮出し、首筋が張り詰める。涎で濡れた唇が大きく開き、絶頂を告げる声が絞り出される。膣が陰茎を強く締め付け、そして激しく蠕動する。

私はその、男の精を求める女の膣の本能的な動きに耐え、そして叫ぶように彰子に命じる。「口を開けっ」

まだ快樂の絶頂の中にいる彰子が、大きく唇を開く。

私は腰を引き、陰茎を抜き出し、立上がり、愛液に濡れ光る陰茎を彼女の大きく開いた唇の上に持つていき、二、三度手で強く擦り上げる。

耐えていた射精の衝動が急速に加速し、私は半ば、彰子の開いた唇の中に、そして、その顔に射精し、精液を振り掛ける。

「ああっ！」

その瞬間、彰子が絶頂の声を上げた。
ベッドの上で、拘束されたベルトを引き千切るほどに跳ね上がり、震える彰子の身体。
究極の一瞬を貪る女の顔。

ぐったりとした身体を、まだ余韻の痙攣に震わせながら、彰子は顔を上げ、まだ射精の雫を垂らしている私の陰茎を咥えこみ、吸い上げる。射精とは別の、苦痛にも似た快感が走る。
私は何故か、先程部屋を出ていったエンプーサの姿を思いだしていた。



「日記はもうお読みになりました？」

激しく淫らな性交の後の気だるさと面映さの中で、彰子が私に聞いた。

「日記？ ああ、まだです、アルバムを見せてもらっただけで……」

彰子が、私の目を覗き込む。

「そうですか、よろしかったらお読みください……」

「……あのアルバムと日記は、やっぱり……私に見せる為にわざと？」

「ええ……」

答えた彰子がすっと立ち上がる。

私は部屋を出ようとする彼女の背中に問い掛ける。

「では、最初から？」

彰子がドアを開ける。

「そうですわ……」

部屋を出る。ドアが閉った。

私は彼女が出ていったドアを見詰める。

窓を叩く雨音が激しくなった。

以下、次回へ